福井大学 大学院工学研究科 研究報告 第57巻 2009年3月
Mem. Grad. Eng. Univ. Fukui, Vol. 57 (March 2009)

構造合理主義建築理論家の「グー*Goût*」論
—ヴィオレ=ル=デュクを中心に—

趙 瑷*, 劉 培建*, 白井 秀和**

On the Theory of *Goût* stated by the Architectural Theorists of Structural Rationality
—Focused on Viollet-le-Duc—

Ai ZHAO *, PeiJian LIU *, and Hidekazu SHIRAI **

(Received February 6, 2009)

The aim of this paper is to discuss the nature of Viollet-le-Duc's theory of *goût*. It is tried through the analysis of his thought under the entry "*goût*" in Vol. 6 of *Dictionnaire raisonnée de l'architecture française du XIe au XVIe siècle*, as well as some related discussions in the first volume of *Entretiens sur l'architecture* about philosophy, aesthetics and architecture. Moreover, this paper aims at showing that an understanding of Viollet-le-Duc's view of *goût* is essential to explore the possibility of his influence on the creation of style in the architecture of our era.

Key Words : Viollet-le-Duc, Goût, Forme, Vrai, Raison

1. 緒言

ゴシック・リヴァイヴァルは、18 世紀後半からイギリスを始め、中世をキリスト教の理想世界としたロマン主義の芸術家の間に起こった、対グリーク・リヴァイヴァルの復興運動である。その時のフランスは、スフロ（Jacques-Germain Soufflot,1713-80）がゴシック建築における構造の特質に注目し始めたが、イギリスに比べて、ゴシック建築には関心が薄かったことは確かであり、皆無に近いと言っても過言ではない状態にあった[1]。フランス国民が誇る民族的建築としてのゴシック建築を見直す端緒を開いたのは、シャトーブリアン(François-René de Chateaubriand, 1768–1848)の著作『キリスト教精髄 *Génie du Christianisme*』（1802）であるとされる[2]。しかし本格的に、フランスのゴシック復興運動に決定的な役割を果たしたのは、ラシュス (Jean-Baptiste-Antoine Lassus,1807-57)とヴィオレ=ル=デュク(Viollet-le-Duc, 1814-79)の二人である。とりわけ、ゴシック建築の構造に合理的な特質があると主張するヴィオレ=ル=デュクが重要である。それは彼の行った空前絶後の試みのゆえである。その浩瀚な著作『中世フランス建築解析事典 1-10 巻 *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XIe au XVIe siècle* I-X』（1854-68）（以下『建築解析事典』と略記）において、彼が建築の基本に構造的合理性にあるという考え方を基に、ゴシック建築についての詳細な考察を行ったことは周知の通りである。ヴィオレ=ル=デュクが『建築解析事典』に設けた 422 を数える項目を、建築芸術に関連する用語 418 語（例えば: *Arc* アーチ、*Voûte* 穹窿, *Arts Libéraux* リベラル・アーツなど）と、建築思潮に関連すると思われる用語—*Goût* グー・*Style* スティル・*Symbole* サンボル・*Unité* ユニテ

* 大学院工学研究科システム設計工学専攻
** 大学院工学研究科建築建設工学専攻
*Systems Design Engineering Course, Graduate School of Engineering
**Architecture and Civil Engineering Course, Graduate School of Engineering

一の4語に、分けることができよう。この割合はまさに書名『建築解析事典』に相応しく、ヴィオレ=ル=デュクがゴシック建築における各部位を割り出し、自らの理論をより納得させる説明を試みた結果であったと言える。本論ではヴィオレ=ル=デュクの建築思潮用語の一つであった「グー」に注目し、この概念の分析を通して、ヴィオレ=ル=デュクの建築における哲学的思想と称してもよい一面を探究することが目的である。

ヴィオレ=ル=デュクの『建築解析事典』の本質には、ゴシック建築のあらゆる部分に機能性・効用性とそれを正当化し得る根拠が存在するとされ、それは、ペローやコルドモワからロンドレに至る、フランスの合理主義的建築論の伝統、すなわち建築の美が構造への真実さによるという考えに由来するのである[3]。ヴィオレ=ル=デュクの『建築解析事典』の項目「グー」論の特徴をより明白に把握するためには、18世紀の建築の批評にとって重要なキーワードとして、ヴィオレ=ル=デュクに影響を与えたと言われる建築理論家が論じた「グー」を、先に述べる必要があると思われる。

2. 18世紀の合理主義の建築理論家によるグー論

「グー*goût*」という言葉は、17世紀半ばにスペインのグラシアンによって、芸術を評価する基準を表わす用語として、17世紀後期にフランスに伝えられ、直ちにペローによって建築芸術の批評に導入された[4]。その後この概念をめぐって様々な論述が生み出され、それはやがて、18世紀の古典建築理論における中核的な存在となった。以下は建築を構造の合理性に沿って考えるべきと主張する古典主義者に提出されたグー論である。それらの大筋を年代順に見ていこう[5]。

1、ペロー(Claude Perrault 1613-88)：建築における美を確定的美と恣意的美とに分け、それらの美を認識するのに導入した趣味は、理性・知性を持つ人だけが備え、良識（*bon sens*）に属するものとされた。ペローの趣味論には、自然を無視した明らかに人為性を帯びた主観的なものがあると思われる。

2、コルドモワ(Jean-Louis de Cordemoy 1626-84)：趣味とは自然において見られる全てのものの中にある優美さ、優雅さ、美そして卓越性を確実に認めるために、人々がもつ繊細な感情にほかならない。特に建築芸術において、趣味は自然のものの中にある最も理性的なもの、最も真実なもの、最も完全なものを選択させ、こうした観念を創作にありのままに表現すると言うような、事物の実在的な美を見出す能力と規定された。

3、ブロンデル(Jacques-Francois Blondel 1705-74)：規則に結びついた趣味が、良い建築家を作り上げる。ギリシア建築とローマ建築の諸原理を通して、理性を基にして、放縦を生み出す恣意的な趣味を規制し、凡庸さと良さ、優秀さを見分ける役割を趣味の原理に付与する。建築家は、建築における規則を確証し得る唯一のものであり、建築における偉大な人々を形成し得る唯一のものであった良き趣味の精神と思考を充満させるために、古今の建築における最も美しいものを分別し研究すべきと主張する。

4、ロジエ（Marc-Antoine Laugier 1713-69）：趣味の概念を理性の領域に取り込み、自らの理性の働きに先立つ、自然から受けた個別的な趣味を認める。また建築家が趣味の反省自体によって美の力を増すと主張する。

5、スフロ(Jacques-Germain Soufflot 1713-80)：趣味は規則であり、規則はすなわち趣味である。趣味が規則を形作り、規則が趣味を形作った。趣味＝規則という等式は、趣味の持つ感性的側面と理性的側面を認めたことを表わし、建築上の相補的な構成要素として捉えられたブロンデルのグー論の影響を受けていた。

6、ロンドレ（Jean-Baptiste Rondelet 1743-1829）：建築家は失われたグーを再度獲得するために、研究（*études*）と知識（*connaissances*）だけに依らなければならない[6]。グーを持つ良い建築家は、フォルムと良い配置によって人々に最大の喜びを味わわせることができることを了解すべきである[7]。

上記のように、17、18世紀の建築理論家達の「グー」論には、知性・良識・美・喜び・理性・感情・規制・能力・フォルムといった言葉との関連が強かった。彼らのグー論と最も絡み合ったと思われるキーワードを引き出せば、下記のような表になろう。

建築家	美	喜び	理性	感情	規則
ペロー	○		○		
コルドモワ	○		○	○	
スフロ	○		○	○	○
ブロンデル	○	○	○	○	○
ロジエ	○	○	○		
ロンドレ		○	○		○

上表に示したように、すなわち、「グー」とは建築の美や良い建築を見た人々が必ず感じる喜びと深く結び付くものとして、理性的であるか、感情的であるか、あるいは理性的と感情的両方であるか、といった三種の取り方があると思われよう。建築を構造的合理性に基づいて考えるべきと主張するこうした 18 世紀フランス古典建築理論と深くかかわりのある「グー」なる語は、ヴィオレ=ル=デュクに受け継がれて、ゴシック建築における本質の説明にも用いられたのである。次に、彼が如何にこのことを受け継いでいたかを『建築解析事典』を中心に見てみよう。

3. ヴィオレ=ル=デュクの「グー」論

ヴィオレ=ル=デュクは従来の建築理論家よりもグーを重要視したと言えよう。これは『建築解析事典 VI』（pp.31-43）に 12 ページもの紙面を占めてグーを論じたことからも了解されることである。これほど詳細にグーを説明した建築家はヴィオレ=ル=デュクが始めてであった。それでは、グーとは彼にとって如何なるものかを、項目「グー」で述べた言に沿って見ていこう。

グーとは何か

グーは建築芸術に導入されて以来、ひたすらものを識別する能力と看做されてきた。ヴィオレ=ル=デュクも例外ではない。彼は、項目の中で最初に、知性（*esprit*）を持つ人は皆、グーによって人間を規制し、罪を防止すると認識し、人間のセンス（*sens*）の中に存在すべき真実なグーは、美と善を好む習慣であり、良いものと悪いもの、美しいものと醜いものを峻別する、人間の知性の理性的成長の印であるために、人間はこのような知性を欠けば、様々な間違いを犯してしまうと言った [8]。さらに一般の人間のグーと比して、芸術家のグーはより一層深みのあるものである。要するに、建築家のグーとは、「知覚・意識・道徳心において偽ることなく、最も自然の方法で表現された芸術家の思想であり、真実を愛する表現であり、知識の純朴的な表現である。誇張・過ちを避け、人間の道徳・理性・感情・意向・目的をありのままに建築に表現する」[9] ものであり、「どのような段階を踏むのか分からないが、正に無意識に行われる推論」[10] のようなものであると、ヴィオレ=ル=デュクは解釈した。この解釈だけ見ても、従来の定義よりも詳しく、しかも多方面に網羅的に考えられた末の結論だという印象を与える。続いてヴィオレ=ル=デュクは、フォルム、真実、理性、明瞭さ、誠実さと言う概念を通して、グーを考察する。

グーとフォルム

建築の本質をフォルム、スティル、グーと習慣に求めるべきと確信する [11] ペローと同様に、ヴィオレ=ル=デュクも建築のフォルム（*forme*）を極めて重視した。彼はグー論の基本をフォルムに求めていた。周知のように、*forme* なる語にはもともと、*εἶδος*（*eidos*）なる語と *ἰδέα*（*idea*）なる語、によって成り立ち、フォルム（形状）とアイディア（考え）という二つ意味が包括されていた [12]。その後フォルムとアイディアはそれぞれ独自の単語となるまで、アイディアを込めた形状は *forme* であった。フォルムとアイディアはヴィオレ=ル=デュクの時代にすでに関係のない二つの言葉となっていたが、彼は、*forme* 本来が持つ原意は現代人にとって建築芸術を理解する鍵であると考えたのであった。すなわち、「建築家はフォルムの芸術家でなければならない。またフォルムの芸術のみが新建築への道を開く」[13] と、建築家と建築フォルムとの関係の重要さを明白に解釈したように、フォルムは古いプラトン以来の哲学者による哲学における諸問題への解決策として用いられ、16 世紀に、パッラーディオによって建築に導入された「フォルム」[14] は、ヴィオレ=ル=デュクによって、グーに極めて重要な働きを付与することになった。

ヴィオレ=ル=デュクにとって、フォルムはアイディアの言語(*la langage de l'idée*)であるだけではなく、また芸術家のグーの表現ともされた [15]。したがって、フォルムはそういうふうになるために、「建築家のアイディア(*idée*)、良い所(*bonnes*)などを表わさなければならない」[16] のである。すなわち、アイディアや良い所を表現するのに、それに「相応しい語法を用いなければならない」[17]。相応しい語法を選択するために、我々がすでに公認されたギリシア建築、ローマ建築のスティルを模倣せずに、それらの建築をまず研究・分析し、建築の多様化と創造の精神を受け入れ、新しい実践を試みなければならない [18]、とヴィオレ=ル=デュクは言う。また、グーが「真実(*vrai*)・純朴(*simple*)・理性(*raison*)という三原理に由来する」[19] と確信したヴィオレ=ル=デュクは、グーの三原理が建築のフォルムを現わし出すものであるために、ギリシア建築もローマ建築も研究すべきと強調した。それは特にギリシア建築が、グーの三原理を最もよく表わした建築だからであった [20]。ギリシアとローマの建築家は表現の方法がそれぞれ違うが、良いグーを形成する法則を尊守したことに関しては同じであった。それは、言い換えれば「理性に形態、すなわち外観を従属させていなければならない」[21] ということなのである。

グーと真実

グーと真実とは芸術において如何なるものかが、18 世紀の古典主義芸術家の次の言によって表わされていた。すなわち「グーは芸術において知性であり、科学の領域においても同様である。真実というのは芸術と科学の目的」[22] である。建築における批評のカテゴリーとして、「真実」は 18 世紀後半そして 19 世紀の創造物であった。ゴシック建築が本当に真実であるかどうかを議論し得るという考え方は、ピュージンが残した遺産であり、それもイギリス合理主義者の理論家から今世紀に至るまで一貫して信服してきた原理と看做された[23]。構造合理主義者としてのヴィオレ=ル=デュクもその原理を用いて、ゴシック建築の構造合理性に関して、ピュージン以上の説明を試みてきた。彼は建築における真実の論を『建築講話 *Entretiens sur l'architecture*』1863-72) の中で初めて明白に示した。時代が変わっても、不変の原理(*principe invariable*)と称された真実[24]は、変わることなく、絶対に設計プロジェクトと建設方法の両面に表わし得るものである。すなわち、「プログラムに従う真実とは、正確かつ綿密に、要求に基づく条件を満足させることであり、建設方法に従う真実とは、材料をその材質と特性に従って使用することである」[25] という。グーは要求の明瞭な意識であり、それを真実な方法で穏やかに表現することが重要で、偽らないこと、すなわち真実は、グーのある建築家に課せられる第一条件とされた[26]。

中世のゴシック建築が永遠に人々を惹きつける主な理由として、中世の建築家が皆グーを持つ人々ばかりであり、レンガ技術に極めて精通した彼らが、決して過去のフォルムを模倣せずに、敢えて今までに使ったことのないレンガに真実な構造を採用し、レンガに真実な装飾を施したことが挙げられると、ヴィオレ=ル=デュクは要約した[27]。真実は人間の道徳・理性・感情・意向・目的をありのままに建築に表現し得る唯一の方法である[28]。グーのある中世建築家たちに真実を徹底的に従ったからこそに、その時代のすべてに適合された建築が創られたに違いないのである。

明瞭さ(*clarté*)と誠実さ(*sincérité*)

ヴィオレ=ル=デュクが『建築講話』の中で、「建築は創造の霊感を自然物の中に求めるのではなく、特定の要求を満足するものであり、また理性によって、定められた法則に従う芸術」[29] と言っているように、建築芸術は人間の要求を満足する法則の芸術である。建築家がグーを作品に表現し、しかも人々にそのグーを理解させるために、なにより自らが作品を通して表わしたいことと、それを如何なる方法によって表現するかが明瞭にすることが極めて重要視された。明瞭に表わすことができるようにするために、まず芸術家自身がそれらの明瞭さの重要性、及び明瞭に表わす考えを持たなければならず、この考えが表現のフォルムを超越することなく、あくまでも我々がグーのある建築フォルム、特にギリシア、ローマのフォルムを研究することが前提とされる[30]。ヴィオレ=ル=デュクは我々に明瞭さの重要性を訴えると同時に、それを獲得する方法も示してくれた。鍵を握るのはギリシア建築であった。彼はギリシア建築をグーを知る最も適切な見本として挙げた理由を、次のように記した。すなわち、「ギリシア人の芸術の本質的特色の一つは明瞭、すなわち建築だけについて言えば、用途と要求と建設方法の明瞭の表現である」[31]。要するに、建築家自らは、建物の用途、その要求及び建設方法を明確に心得しなければならないのである。

「誠実さはすべての芸術作品に、知識人もあまり教養を積んでいない人も惹きつける魅力を与えた。私たちは嘘偽の強い習慣により、建築に対する公衆のグーを歪めてしまったが、あるがままに見える誠実の作品にたまたま出会う時、公衆は興味深くなり、凝視する。誠実は、グーの人に課せられる第一規準である」[32] とされた。この基準を堅く守ったのは、ギリシア建築とローマ建築であるとヴィオレ=ル=デュクは言う。それは、ギリシア人もローマ人も石材、木材、金属、スタッコなどの材料を建物の適切な装飾、フォルム、構造しか使わないからである[33]。ゴシック建築も当然に、遠洋汽船が辿ったのと同じくらい着実な実験と進歩と過程を経て生み出されたのであって、決して単純な美的なものとしてデザインされたわけではない。誠実はそのゴシック建築の最も著しい特色の一つであるだけではなく、誠実も芸術におけるスティルの本質的条件の一つであり、建築費を節約する条件の一つであり、グーを表現する最もいい方法の一つであると言う。誠実とはヴィオレ=ル=デュクの次の言によって説明されるであろう。要するに、部屋が広ければ窓も大きく、小さければ、窓も小さくなり、採光する空間に応じて開口部の規模を決め、建物が数階建の時に外観でそれが分かるように造らなければならない[34]。言いかえれば、すべてのものをそのあるべき所に置き、本来の性格を与えるべきである。真実、純朴、理性の原理に由来したグーは、単に偶然の関係ではなく、グーは「現実の事物と密接な関連をもち、真理の尊重も不可欠である。グーは要求、用途、必要性を誠実に表現するものであり、目的によって、フォルムを考える」[35] ものである。それゆえ、「外交部の門に

宮殿用のファサードを、不必要な壁の前に列柱を、歩行者がいない建物に、歩行者用の柱廊を、市役所に教会堂の外観を、裁判所にローマ神殿の外観を与えることは堅く許せないこと」[36]であり、「部屋は部屋のように、宮殿は宮殿のように、教会堂は教会堂のように、城は城のように造らなければならない」[37]。このように作った建物はグーを持つと言えよう。それはそれらの要求、用途、目的を明確に表現し得たからである。それだけではなく、また建築家のアイディアを適切な建築材料—石材、木材、鉄などの建築材料が各時代の要求を満足していることが必要である—と構造の必要性に応じた適切なフォルムによって表現されたからこそ、というべきであろう[38]。

4. ヴィオ=レ=ルデュクのグーに関する教育論

グーは芸術家にとって生命と同等な価値を有する、芸術家を養うのにもっとも重視すべきものである。そのことを、ヴィオレ=ル=デュクの『建築講話』の第一講の内容より読み取ろう。それは、「グーを身につけるとは、美と善を好む習慣を身につけることであり、それによって美を発見し、選択するすべを心得」[39]、芸術家の美感を育成するのに重要な過程だからである。詳しい内容を『建築解析事典』中の項目「グー」に見出すこともできる。すなわち、グーは「決して人間の生れ付きの才能ではない。グーは教育された痕跡であり、社会及び生活環境の忠実の反映であり、同時に辛い訓練に耐えてきた円満の完成である。周知のように、学習と比較をすることによって、良いものを見、理解する。それによって選択をする目的を達する。我々は全ての事物の評価を安易に信じてはならず、ものの真偽を選別する能力を身につけなければならない。凡庸を避け、熱狂を恐れるべきである。これはグーの表現の手段である。グーは長い年月をかけてようやく獲得するものである。観察という行為も絶対に欠くことなく必需なものであり、またグーは決して正義と真実の範囲を超えてはならず、盲目的にやることを禁じなければならない。建築家の栄誉と見るべきグーは、汚染や偏り、一つの建築党派の特権にしてはならない。公衆への尊重はグーの第一表現であり、誠実はグーの最もいい表現である」[40]、と記述した。

また、ヴィオレ=ル=デュクは19世紀の建築に個人性を欠く根拠を次のように、「その第一は、建築芸術の良い趣味を民衆の間に広めるのに適していない行政機構、第二は建築教育の欠除、第三は上流社会における趣味の低下」[41]と、三つの論点でまとめあげた。第一点は、芸術発展における自由の度合いと関連している。フランスの最初の建築家と呼ばれたフィリベール・ド・ロルムが建築家に自由を与えるべきと唱えて以来、精神的自由はヴィオレ=ル=デュクの建築芸術観の中にきわめて重要なポイントになったと言えよう。それは、「芸術は思想の表現であるから，自由がなければ芸術は存在しない」[42]と表明する言からも了解することである。そのような発言は『建築講話』の中によく見出されるものである。次の言もそうであった。ヴィオレ=ル=デュクにとって、芸術は完成の域に近づく前提として、二つの自由を備えるべきであるとする。それは「十分に能力を発揮する自由と、自然界と人知が提供する一切の材料を使用する自由とを与える」[43]ことである。ギリシア建築とローマ建築と中世フランスのゴシック建築とのすべては、運動と議論，新しい要素の不断の補給、および理性の統制に服した自由によってはじめて生き続け、最終に輝かしい発展に遂げたという[44]。第二点は、建築教育の欠如によって、良い芸術家の育成に阻むことを言う。第三点は17世紀からグーの主導権を握ったのは上流社会の貴族であり、18世紀後半から芸術が一般人の手に移りつつあったとはいえ、良好な教育を受けた上流社会の人々が依然として芸術に強い影響力を持っていたということである。彼らのグーの低下は芸術に対するグーの低下を意味するのである。

5. 結言

本論はフランス構造合理主義者として名高いヴィオレ=ル=デュクによるグー(*goût*)の分析を通して、彼の建築的（ひいては哲学的）思想を論ずるものである。「グー」という概念はペローによって建築理論に導入されて以来、フランス古典主義理論家の中枢的な概念として様々に論じられてきた。このような建築思潮が依然として主流とされた時代に生きたヴィオレ=ル=デュクはその影響下にありながらも、従来の建築理論家より極めて詳細な分析を行っていた。彼がグーを重要視したことは彼の数多くの著書から十分に確認できることであり、特に『中世フランス建築解析事典』において顕著であった。

ヴィオレ=ル=デュクにとって、グーとは一種の物質的な利益ではなく、知性的能力の理性的発展である。グーに満足された建築は、道徳の基に正真正銘の愛と知識の表現であり、明瞭な真実的で理性的な表現であり、濃密な感情の表現であり、人を喜ばせる優美的な表現であり、スティルと一致していた表現なのである。このようなすべての表現を持つ建築として、ギリシア建築とローマ建築とゴシック建築

が挙げられると主張された。ヴィオレ=ル=デュクは、ギリシア建築のグーは明瞭さと、ローマ建築は長期な知識の累積と異なる質と、ゴシック建築は誠実さと密接していると強調した。グー的な建築をするために、まず建築家はグーを持たなければならない。頼りになるのは、素晴らしい建築作品を研究・分析することである。それによって良い建築、平庸な建築を分別することができるようになるのである。
また、グーには二つの重要な要素がある。すなわち誠実がグーの法則であり、真実が理性的なグーにとって極めて重要な規準なのである。我々はそれを取得することで、スティルを失う危険を回避し、従来の伝統を打破し、新しい建築を生み出す可能性を持つことになる。ヴィオレ=ル=デュクは趣味に、19 世紀に属する独自のスティルを生み出すことを託したと言えよう。グーを有する建築家の仕事とは、すべての事物に用途と合った外観を与えることである。原理を堅守し、財源と知識を要求の満足に投入する。要求を誠実に重要視すべきなのである。ヴィオレ=ル=デュクは、建築家が社会や個人の要求を建築に取り込み、ギリシアやゴシックの人々はすでに人間の動物的要求を満たす「真の必要」という必要のみに発想を得た建築を達成していたと信じていた。

総じてヴィオレ=ル=デュクのグー論には１８世紀建築家の論に踏み込んだ痕跡が見えるが、彼の目指す趣味の真の原理へは、ギリシアの範に倣って、自然の美の研究と、理論と実践によって得られるものとを結びつけることや、様々な種類の建物を比較することなどを通して導かれることになるのである。

注：

1. David Watkin, *A History of Western Architecture*, Laurence King, London, 2000, p.399.
2. Denis Hollier, *A New History of French Literature* (*De la litérature francaise*), Harvard University Press, London, 1994, pp.609-613；また、羽生修二の「建築教育と様式論争」（鈴木博之他、『都市文化の成熟』、東京大学出版会、2006、p.278.）を参照。
3. David Watkin, *Morality and Architecture－ The Development of a Theme in Architectural History and Theory from the Gothic Revival to the Modern Move ment*, University of Chicago Press, 2001, pp.27-29； 榎本弘之訳：『モラリティと建築―ゴシック・リヴァイヴァルから近代建築運動に至るまでの、建築史学と建築理論における主題の展開』、鹿島出版会、1981、pp.54-59 を参照。
4. 白井秀和、理性としての趣味：「ペローからブリズーまで―フランス古典主義建築思潮における趣味の問題Ｉ」、日本建築学会論文報告集、第 338 号、昭和 59 年、p.150-157.
5. この部分は、白井秀和による趣味に関する二編の論文に基づいて重点をまとめたものである。特に、ペロー、コルドモワ、スフロ、ブロンデル、ロジエの五人についてである。詳細は注４の論文と、その姉妹篇の「感性的趣味論への変遷：ブロンデルからカトルメールまで―フランス古典主義建築思潮における趣味の問題　II」、日本建築学会論文報告集、第 342 号、昭和 59 年、pp.114-121 を参照。
6.Jean Rondelet, *Traité théorique et pratique de l'art de bâtir avec atlas de plances*, Vol. III, Chez l'auteur, Enclos du Panthéon, Paris, 1805, p.83.
7. *Ibid.*, Vol. II. p.333.
8. Viollet-le-Duc, *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XIe au XVIe siècle*, Librairies Imprimeries Réunies, Paris, 1875,Vol. 6, p.31.
9. *Ibid.*
10. Viollet-le-Duc, *Entretiens sur l'architecture*, Vol.1, A. Morel et Cie éditeurs, Paris, 1863, Vol. I, p.29；邦訳版の飯田喜四郎訳、『建築講話』第一巻、中央公論美術出版、2004 年、p.24.
11. Hippolyte Rigault, *Histoire de la Querelle des Anciens et des Modernes,* Hachette , Paris, 1856, p.199.
12. S.C. Woofhouse, *English-Greek Dictionary*, Routledge & Sons, London, 1910, p.338.
13. エイドリアン・フォーティー著、坂牛卓他訳：言葉と建築―語彙体系としてのモダニズム、鹿島出版会、2006、p.220.
14. 同書、pp.220-256.
15. Viollet-le-Duc, *Dictionnaire*, Vol. 6, p.32.
16. *Ibid.*
17. *Ibid.*
18. *Ibid.*
19. *Ibid.*, p.36.
20. *Ibid.*, p.32. この点に関しては、『建築講話』の中にも記されている。
21. Viollet-le-Duc, *Entretiens sur l'architecture*, p.333; 飯田訳前掲書、p.239.
22. Charles Batteux, *Les Beaux Arts,* Durand, Paris, 1746, p.56.
23. 榎本訳前掲書、pp.39-52.
24. Viollet-le-Duc, *Entretiens sur l'architecture*, p.15; 飯田訳前掲書、p.12.
25. *Ibid.*, p.451; 飯田訳前掲書、p.323.
26. Viollet-le-Duc, *Dictionnaire*, Vol. 6, p.40.「le vrai est la première condition du goût.」
27. *Ibid.*
28. *Ibid.*, p.31.
29. Viollet-le-Duc, *Entretiens sur l'architecture,* p.28; 飯田訳前掲書、p.23.
30. Viollet-le-Duc, *Dictionnaire*, Vol. 6, p.33.
31. Viollet-le-Duc, *Entretiens sur l'architecture*, p.59; 飯田訳前掲書、p.44.
32. *Ibid.*, p.484; 飯田訳前掲書、p.346.
33. Viollet-le-Duc, *Dictionnaire*, Vol. 6, p.35.
34. *Ibid.*, p.34.
35. *Ibid.*, p.36.
36. *Ibid.*, p.34.
37. *Ibid.*, p.36.
38. *Ibid.*, p.37.
39. *Ibid.*, p.36.
40. *Ibid.*, p.34.
41.Viollet-le-Duc, *Entretiens sur l'architecture*, p.276; 飯田訳前掲書、p.386.
42. *Ibid.*,p.478; 飯田訳前掲書、p.342.
43. *Ibid.*,p.319; 飯田訳前掲書、p.230.
44. *Ibid.*,p.323; 飯田訳前掲書、p.232.